

南方関与の論理

1. 研究組織

研究代表者：小島 勝（龍谷大学文学部・助教授）

研究分担者：清水 元（長崎県立大学大学院経済学研究科・教授）

蔡 史君（津田塾大学学芸学部国際関係学科・助教授）

波多野澄雄（筑波大学社会科学系・助教授）

早瀬 晋三（大阪市立大学文学部・助教授）

2. 研究のねらい・目的

(1) 日本の「南方関与」に関する研究は、矢野暢著『「南進」の系譜』（中公新書、1975）によって開始されたが、これを契機に、「南進論・政治過程」、「軍事」、「経済進出」、「移民・在留邦人社会」、「人権・道義的観点」、「交流」、「現地の人々の見方」などと分類される領域で、急速に研究が進捗してきた（小島勝「『「南進」の系譜』以後」矢野暢編『講座東南アジア学10 東南アジアと日本』〔弘文堂、1991〕参照）。近年の成果は、前掲『講座東南アジア学10 東南アジアと日本』であるが、矢野氏が提起した問題意識である①「アジア主義」との非連続性、②明治時代の「無告の民」への評価、③大正時代の「南進論」の特質、④大東亜共栄圏構想と南方関与との関連性、⑤戦後の日本人の東南アジア進出につきまとう精神性と戦前と「南進」との連続性、⑥南方関与を行なった個々の日本人や個々の進出企業の個別研究という課題の追究は今なお進行中であり、われわれの共同研究もこの研究課題を継承している。

「南方関与研究」は、日本人の東南アジア地域研究の基本的研究姿勢を問い続けるエトスを内蔵しているが、より広角的・精緻な事実の発掘とそこに通底する論理の析出への努力を行ないたい。

矢野氏によれば、「南方関与」とは、「日本人の南方との自然な関わり方の総体」のことであり、この「南方関与」が国策と結びついて、侵略的傾向を帯びた局面が「南進」であるとするが、この見解は今日広く定着している。「からゆきさん」や民間の商人、商社・銀行・メーカーの経済人ないし企業人、政治家や軍人、教育者や僧侶など多くの日本人が、「南方」すなわち現在の東南アジア地域と関わったが、その関わり方に脈打つ「論理」をより総合的・重層的に鮮明にし、今後の東南アジアとの関わり方の指針を把握したい。

(2) この究明の仕方として、まず第1に、日本国内の政治・経済・軍事・教育・文化などと

の関わりの論理の追究ということがある。政治・経済・軍事・教育・文化は各々独自の論理を内包しながら、その時代の「南方関与」の制度化と連関している。南方への移民の様相、「南進」において、各々の論理をもっている。

第2に、「日本の南方関与」と言っても、この「日本」には、本土の日本人、沖縄県人、日本統治時代の台湾・朝鮮人、日本人との婚姻関係をもつ者およびその子弟、さらには北米などの日系人などがあり、そこにはそれぞれ特有の南方関与の論理があったであろう。この説明も重要な視点を提供する。

第3に、「南方」の中での地域差にもとづく「論理」の比較対照がある。大陸部と島嶼部、植民地宗主国別などである。そして第4に、日本人の職種別・社会階層別の「論理」の比較対照ということがある。第1～第4は相互に関係性をもっているが、これらが時代相の変化に応じていかなるダイナミックスを描いたのか、その絡みをより広角的・重層的に事実に基づいて理論化したいと考える。

- (3) 清水元は、主として経済的側面から「南進論」や「東南アジア」概念、「環太平洋構想の原型」について、古代から遡る日本の南方関与の歴史を「海の論理」から説き明そうとする。祭史君は、マレーシア・シンガポール地域を中心に現地サイドから、台湾人の活動などを通して日本の軍事侵略と文化工作の真相に迫る。また、波多野澄雄は、日本陸海軍の南進構想・戦略と現実の外交地場との連関を、今まで明らかにされなかった史実を発掘しながら日本の南方に関する「外交・軍事の論理」を究明する。早瀬晋三は、フィリピン渡航者のデータ分析などを通して、「南進」ではない民間人の「南方関与」の属性を調べ、そこにおける論理を明らかにする。小島勝は、在外子弟教育の制度化過程を主として分析しながら、「教育」の側面から日本人の南方との関わりに潜む論理を析出する。

3. 平成6年度の研究経過

今年度も前年度に引き続き、研究分担者が自ら発表するとともにゲスト・スピーカーを依頼し、また南方関与に縁のある場所における研究会開催を担当するという方針で、研究会活動を遂行した。

- (1) 第1回研究会：7月2日（土）～3日（日） 場所；長崎県平戸市

2日には、平戸海上ホテルにて研究会を開催し、清水元による「西海から見た日本史」、ゲスト・スピーカーの川勝平太・早稲田大学政治経済学部教授による「南方（南アジア）関与の比較経済史」の研究発表があった。3日は、松浦資料館などを見学したが、各々の

発表と後の質疑の概要は以下の通りである。

i) 清水元「西海から見た日本史」

長崎県立大学のある佐世保市川下町は昔、肥前国松浦藩相浦とあったが、ここは中世倭寇の本拠地の一つであり、木宮神社・亀山八幡宮なども、海に生活する「海人」ないし「海民」の信仰の対象である。柳田国男は、「日本人は海に背を向けて暮らしてきた」というが、この辺の海を見ていると日本人は本当にそうであったのか疑わしい。海流を見てみても、古くから東南アジア・台湾などとの交流の可能性が高いのである。この「西海」地域の海人のルーツは、古モンゴロイドであり、半農半漁の江南稲作ルートの担い手と南島稲作ルートの担い手が合わさったものであろう。『魏志倭人伝』にある「倭人」がそうであり、紀元前5世紀頃から漁業を営み、船住まいの生活であった。また肥前国が「火国」と呼ばれているが、火の焚かれる場所であるヤマは、海人にとって目印であり、「聖なる空間」であった。地名を見ても sasa, sasi の音韻が多く、朝鮮語の場所・空間＝城の語義ではないか。こうした「聖なる空間」が国造りの発想になっているのではないか。

そして、海から宝物が来るという「水平信仰」が海人の信仰であった。建国神話においても、国生み神話（水平信仰）と天孫降臨神話（垂直神話）からなっている。アマテラスも、「天照」とともに「海照」でもあったのではないか。大和朝廷の倭の五王も、畿内―瀬戸内海―沖の島―朝鮮半島・中国大陸の通交を支配していた。12世紀後半に「松浦党」水軍が結成されたが、権力への日和見的中立性と柔軟性をもつ両属性・境界人性を特徴とし、これこそ「海人」の本領であった。この松浦党が「前期倭寇」（13～15世紀半）・「後期倭寇」（15世紀半～16世紀）の主体になる。近世の松浦氏は、ポルトガル貿易の時代・オランダ商館時代を経るが、明治維新に際しても、皇族と深い関係にあったにもかかわらず、容易に尊皇・倒幕の方針を出さなかった。

明治期になって、「猶興書院」より菅沼貞風・稲垣満次郎・浦敬一・志佐要一郎・石橋兎三郎・沖禎介らの「平戸派南進論者」が輩出されることになる。明治期南進論は、相反する、パワー・ポリティックスと自由貿易主義が結合されたものであるが、これは幕末の進取経略論・航海遠略論を源流としている。菅沼の海軍の制海によるシーレーンの確保・防衛策は、古代以来の「海人」の伝統を継承するものである。「南方関与」の移民送出手も殆どは、九州・瀬戸内・沖縄・和歌山などの「海人」によって行なわれた。

この報告をめぐって、次のような質疑が行なわれた。

①「海人」と「海（洋）民」「海浜民」はどのように区別されるのか。「海人」は個人的

であり定着した社会をつくろうとしないが、「海（洋）民」「海浜民」は社会をつくる。しかし、両者の境界はないのではないか。

②滋賀・福島はどうか。宮崎・大分もどうか。

③「西海」は、貧困で権力基盤の弱いことも、日和見的性格につながっているのではないか。

④「海人」は記録を残さない。陸の人間が記録を残す。

⑤明治期南進論者の意見は、明治政府の政策に反映しなかったが、海運には着目していた。

⑥「海照」が「天照」に変わったのではないか。

⑦「海人」といっても、海を利用している支配民族・海運力のある民族・その下の漂海民がいるので、分けることも必要ではないか。

ii) 川勝平太「南方（南アジア）関与の比較経済史」

西ヨーロッパ（特にイギリス）と日本の、ユーラシア大陸の両端で起こった生産革命によって、「近代世界システム」はイスラム文明（環インド洋のイスラム文明海域圏）から自立し、徳川日本の鎖国システムは、中国文明（環東・南シナ海のインフォーマルな海洋中国）から自立した。その過程は、旧アジア文明から自立して離脱したという意味で、日本とイギリスに共通であり、「脱亜」といえる。「東南アジア」は、環インド洋、環シナ海の交叉するところである。また近代世界システムを政治的に特徴づける「戦争と平和」の世界観は、イスラムの「戦争の家」「平和の家」に由来し、徳川日本を特徴づける「華（文明）と夷（野蛮）」の世界観は、中華思想に由来する。この意味で、東アジア世界は、19世紀に至るまで独自の文明空間であった。日本の開港は、アジアへの開国でもあった。明治日本は、東アジア諸国との「アジア間競争」にまきこまれ、それに勝利することによってアジアにおける最初の工業国家になった。

従来のマルクス主義の唯物史観も戦後京都学派の生態史観も、ともに陸地史観であり、海洋を不可欠の条件として成立したヨーロッパと日本の経済発展を理解する上で限界がある。梅棹氏の「文明地図」も「海域」を念頭に修正する必要があるとあり、東南アジアも「第二地域」ではなく、「海域」に含めるべきなのである。

明治期に勃興した日本の綿紡績工業は、広く流布している説明とは違い、欧米の綿工業とは競争していなかった。むしろ、インド綿工業との競争に打ち勝つことによって、アジアに覇権を打ち立てる道を開いた。第一次大戦以後は、日本は「長繊維綿花—細糸—薄地」に転換し、欧米との競争になる。ここに「南方関与」の時代が開始される。欧米の論理であるパ

ワー・ポリティックスと自由貿易論を日本も採用するようになるが、自由貿易論はそもそも大英帝国の自給圏の論理であり、これと日本の自給圏の論理がぶつかることになる。

本発表をめぐる、以下のような質疑があった。

- ①アメリカの綿工業とアジアとの関係はどうか。
- ②シナ海の交易圏を支配していたのは中国人であるが、この中国人を克服したのが日本である。最後までこの東アジアへはイギリスが入り込めなかった。
- ③ウォーラスチンは、近代世界システムの成立に関して、イスラム世界からの自立、アジアからの外圧の視点を欠いていた。「海域」からのインパクト、経済的脅威がイギリスと日本に近代における自立を促したのである。
- ④「大東亜共栄圏」の成立とは、「華僑経済圏」を奪うことであるという説もある。「華僑ネットワーク」、インターナショナル・チャイニーズ・システムの存在は大きい。
- ⑤「中国」は国家ではなく文明であって、「ヨーロッパ」と等しい概念ではないか。中国には「領土」という概念がない。
- ⑥アジアには「国家」概念が弱いが、アジアにはアジアのあり方があってよい。
- ⑦自由貿易は、国旗を背景にイギリスのようにやれと言ったのが、菅沼であった。

(2) 第2回研究会：9月22日（木）～23日（金・祝） 場所；愛知県蒲郡市

22日には、富士見荘にて蔡史君が「日本の南進政策に於ける台湾人の活動」を発表し、ゲスト・スピーカーとして後藤乾一・早稲田大学社会科学研究所所長が「《1930年代『南進』と『ポルトガル領ティモール』》問題」を発表した。また、23日には倉沢愛子・名古屋大学大学院国際開発研究科教授が「日本軍政下の輸送問題」を発表した。午後は、近くの三ヶ根山の元フィリピン在留邦人慰霊碑を見学した。

i) 蔡史君「日本の南進政策に於ける台湾人の活動」

「南進拠点」としての台湾と台湾人に与えられた「使命」は、台湾と南洋との地理的環境と気候の相似性、民族・言語から見た台湾人と東南アジア華人との相似性を基盤としていた。台湾人の東南アジアに於ける特殊活動の特徴は、戦前においては、①親日分子の取り込み、②抗日活動の破壊、③偽造紙幣の流布と使用による経済攪乱、④治安の攪乱であり、日本軍占領期においては、①憲兵隊・軍隊の通訳、②憲兵隊の耳目となり華人の監視、③日本軍に日用品を供給する商店の開店であった。

ケース・スタディとして、2人の台湾人の事例を取り上げる。胡志鋒の場合、戦前は大昌会社の社員であったが、日貨排斥団体に日本人に関する情報を頻繁に提供していた。しかし、

日本軍占領期には、抗日シンガポール華人の探索に非協力的姿勢を見せた。黄堆金の場合、戦前はシンガポール南洋倉庫の社員であったが、「南声倶楽部」を創設し、台湾の歌手、ダンサーなどを呼び、文化活動を行っていた。しかし、日本軍占領期には憲兵隊のもとで働くようになり、通訳として「華僑協会」で勢力をもつに至る。そして、南声倶楽部は、「浪機関」の拠点のひとつとなり、日本軍降伏後に黄は獄死した。このような事実から、戦後、「台湾人」は悪いイメージで、日本軍への協力は民族的悲劇であった。

本報告をめぐる以下のような質疑があった。

- ①従来は、「台湾人」は「被害者」として捉えられていたが、華人への「加害者」としての視点は興味深い。「台湾籍民」まで上げるともっとおもしろい。
- ②彼らの意識はどうであったのか。日本人になりきっていたのか。やむなく協力的であったのか。協力を装うことで華人・華僑を守ったのか。
- ③台湾人・日本人に拘らず、具体的に個人が何を行なったかが問題である。
- ④B C 戦犯において、台湾人の弁明の記録はあるか。英領マラヤにおいては、台湾人は重要であり、ここに特徴的なことはなかったか。フィリピンやインドネシアでは、こうした事例はあまりみられない。
- ⑤台湾人を使うということを誰がどのように決めたのか。二人は訓練されていない。台湾人を使う親玉は訓練されている。
- ⑥日本の国策として、台湾人を使うということを記載した文書はある。金も出していたのか。
- ⑦台湾総督府が支援する過程で何をしたのかがわかるか。
- ⑧日貨ボイコットへの対処は領事館の仕事であった。
- ⑨文化活動には、劇団や学校の創設ということがあった。
- ⑩台湾人の人口はどれくらいであったか。日本人会との関係はどうか。台湾人の日本人クラブへの参加の資格はなかった。
- ⑪スパイ活動については、資料的にも一元的ではなく、イギリス側・日本側と両面的に捉えなくてはならない。
- ⑫台湾人の協力の心境は、愛国心・日本への忠誠心もあったのではないか。台湾人で、今日中国人よりも日本人との距離が近いという学生もいる。1920年代に育った台湾人という世代の問題もある。皇民化教育を受けた世代は臣民になりきっていたという面もあるのではないか。

⑬台湾人には、混血児・沖縄人と共通した問題がある。

⑭台湾を「南進の拠点」という場合、具体的にどのようなことをいうのか。海軍はどのように考えていたのか。

ii) 後藤乾一「《1930年代『南進』と『ポルトガル領ティモール』》問題」

日本とポルトガル領ティモールとの関係は、1933年以前においては、「太平洋方面における和蘭国（葡萄牙国）の島嶼たる属地に関する同国の権利を尊重することを固く決意」という公文書に見られるように、日本に領土的関心はなかった。しかし、1930年半ばから「濠亜地中海」という言葉でこの地域を指すようになり、国際連盟脱退後の1933年7月には、「『経済的共存ノ主義』からの日ポ共同での資源開発」、「亜細亜ト濠洲ノ間ニ介在シテ軍事上、交通上特ニ重要ナル地位ヲ占ム」という公式見解が示されるようになる。海軍も、石油の採れるこの島に注目し、“南の満鉄”と呼称された国策会社・南洋興発株式会社（社長・松江春次）が積極的に乗り出すようになる。オーストラリアは、1901年の連邦国家成立以来、日本を最大の脅威と捉えていたが、日本がティモールを「第二のダバオ」「第二の仏印」としてターゲットを定めるようになっていただけに、脅威は増幅した。1941年10月、大日本航空株式会社と日ポ航空協定が結ばれ、オーストラリアは、1941年の日米開戦からは対米関係最重視に転換し、日本に対抗する戦略をとった。こうした経緯について、オーストラリアに資料が残っている。『南海の花束』は、ティモールを目指す日本軍の模様を映画化したものであるが、今後、ポルトガル側の資料をも調べて、この問題をさらに研究したい。

本発表について、次のような質疑が行なわれた。

①西半分はオランダ領であるが、ポルトガル領として残ったことの経緯はどのようなものであったのか。

②船の航路は早くからあったのではないか。

③1930年代に、この島の買収の話が出ているのは時代錯誤ではないか。

④社会党が、ティモール開発を戦後も主張しているが、社会党との関係はどうか。

⑤蘭領東印度とティモールとの関係はどうかであったのか。

iii) 倉沢愛子「日本軍政下の輸送問題」

①ジャワは果たして南方の兵站基地たりえたのか、②米穀を始めとする島内生産物資の極端な不足をもたらした原因は何か。この2つの問題を、「輸送力」という観点から検討してみたい。ジャワにおける米不足の原因は、①増産キャンペーンの失敗、②強制供出制度に伴う不正、③輸送力不足、であった。統制経済下の米穀流通機構は、生産者強制供出）—村落

の役人—製米所—米穀御売組合—米穀小売り組合—小売店—消費者というものであり、陸輸総局や第四鉄道司令部が運輸行政にあたっていた。

輸送力低下をもたらした原因として、①軍需輸送が優先されたこと、②燃料不足、③貨物の流れが東から西へと偏っていたため効率的な貨物の配車が困難であったこと、④車両不足（ゲージ統一の結果、広軌車両の使用が不能になり、新規補充はなく修理も困難であったことなどが挙げられる。そのための対策として、バヤ線の開設や小型木造船の建造が行なわれたが、不十分であった。その一方で、泰緬鉄道への資材提供という事態もあった。）

本発表をめぐって次のような質疑があった。

- ①日本軍政は、州間の直接的物資のやりとりを禁じ中央経由を強いたため無駄が多かった。
- ②ゲージの統一は、南方作戦の統一を図るために施行されたもので、満州・朝鮮との連結を考えていた。
- ③ジャワでの輸送網の整備については、満州がモデルになっており、オランダ時代のものを生かすことがなかった。これには、オランダ時代の砂糖・コーヒー・ゴム・茶の生産を切断したということとも関連がある。
- ④スラバヤ港が使えなくなり、ジャカルタ・マラヤ・スマトラなどの港を使わねばならなくなると、東から西への輸送力が必要になった事情も考慮しなければならない。
- ⑤ジャワは、労務者の供給に寄与したが、食料の兵站基地としては機能しなかったと言えるのではないか。
- ⑥陸運総局の権限は、実際にどうであったのか。

(3) 第3回研究会：12月4日（日）～5日（月） 場所：愛知県那覇市・金武町

4日には、沖縄ホテルにて研究会を行ない、小島勝が「『日本』の南方関与の多重性—フィリピンのダバオにおける沖縄県人子弟と混血児童生徒の教育問題を通して」を、石川友紀・琉球大学法文学部教授が「東南アジアにおける沖縄県出身移民の歴史と実態」を発表した。午後は、金武町役場内の「金武町史料編纂室」において南方関与関係史料を閲覧・蒐集し、また金武町教育委員会にてフィリピン移民関係史料・歴史的遺物を見学した。

5日は、沖縄県立図書館などを訪れ、資料を蒐集した。

i) 小島 勝「『日本』の南方関与の多重性—フィリピンのダバオにおける沖縄県人子弟と混血児童生徒の教育問題を通して」

「フィリピン・ダバオの日本人学校児童生徒の戦争体験」（『新沖縄文学』No. 84, 1990）、
「戦前のダバオにおける日本人学校の研究」（『龍谷大学論集』第436号, 1990）と「ダバオ

への沖縄県人移民関係略年表」(当日用意)をもとに次のような発表を行なった。

「日本の南方関与」といっても、「日本」が多様である以上、多重性をもっている。沖縄県人の移民の歴史を見ると、量的にも質的にも南方と深く関わっているにもかかわらず、これまで不当に軽視されてきた。日本国家にとっては、沖縄県人が海外移住することは助かることであったが、実際は彼らの海外での生活状態の「悪さ」や「学力の無さ」が、国辱的でもあった。1927(昭和2)年に、沖縄県海外協会が「ダバオに於ける沖縄県移民の長所及短所欠点」なる公文書に抗議したことは、その象徴的な出来事であった。沖縄県人には、「本土人」との分離、しかし反面の過剰同調・融合の傾向も見られた。沖縄県人子弟の引け目や鬱屈した心理はそうした大人社会の反映であった。また、現地人を母親にもつ混血二世の歴史も複雑である。妻名義の土地なら所有できたダバオの在留邦人を父親にもつ混血二世は、戦争を契機に日本への協力を責められ、強制送還による家族の生き別れ、戦後の隠れての生活を余儀なくされた。日本精神体得の誇りとその後の境遇から来る怨念の感情が混濁している。さらに、日本統治下台湾人や朝鮮人の南方関与の実相はどうであったのか。日系アメリカ人の南方関与にはについてはどうかなど、多様な日本人が、多様な南方といかに関わったのかを追究することが、南方関与研究に重層性を与えるのである。

本発表について、①「ダバオに於ける沖縄県移民の長所及短所欠点」に関するより詳しい記録がある。①ベンゲット移民より先に須田良輔なる人物がダバオに渡っていた事実は興味深い。②沖縄県人の渡航が禁止されたことがある事情を、さらに検討する必要があるなどの発言があった。

ii) 石川友紀「東南アジアにおける沖縄県出身移民の歴史と実態」

氏のこれまでの研究業績である、①「日本移民研究のための基礎試論」『汎』1、PMC出版、1986、②「海外移住の歴史的要因」『海外移住の意義を求めて』外務省・国際協力事業団、1979、③「沖縄と移民、沖縄県移民に関する文献紹介」『新沖縄文学』No. 45, 1980、④「海洋民・移民としての沖縄県人」『熱い心の島』古今書院、1992、⑤「第二次世界大戦前における沖縄県からフィリピン群島への移民の歴史と実態」『神・村・人』第一書房、1991、⑥「移民と国際交流—東南アジアへの沖縄県出身移民を例として」『新沖縄文学』No. 72, 1987、⑦「沖縄県から東南アジアへの移民の歴史」『地域からの国際交流—アジア太平洋時代と沖縄』研文出版、1986にもとづき、①移民の定義、②沖縄県における出移民の歴史、③フィリピン群島・蘭領東インド(インドネシア)・英領マレー(マレーシアとシンガポール)における沖縄県出身移民の実態、④東南アジアにおける沖縄県出身移民の特質に

についての発表があった。

日本移民の歴史的要因として、①海外志向性、②人口過剰、③農村の経済的疲弊、④政府の移民政策と民間の移民会社の出現、⑤優れた移民啓蒙家や指導者の出現、先輩移民の成功が、移民を押し出す要因となり、①世界労働市場における労働力の要求、②高賃金の魅力、③先駆移民の呼び寄せが、外国から移民を引っ張る要因になった。沖縄県からのフィリピンへの移民は、ベンゲット移民を嚆矢とするが、太平洋戦争直前には沖縄県出身移民数は約2万人で日本移民全体の7割を占め、ハワイ・ブラジル・ペルーについて第4位であった。東南アジアにおける沖縄県出身移民の特質は、①中世から近世にかけて国際交流のあった地域であり、親近感があったこと、②熱帯・亜細熱帯の気候的に類似の地域であり、感覚的に疎外感がなかったこと、③水産業において現地に大きく貢献したこと、④純粋の移民としての労働者であり、階層的には支配者層である白人や日本本土出身移民と原住民との中間層に位置していたこと、⑤県人同士の団結が強く、郷里への送金も多かったこと、⑥祖先伝来の海洋民族的性格をもっていることにある。

本報告をめぐる、若干の質疑があったが、氏の移民研究の蓄積に圧倒された研究会であった。

4. 研究の成果とフロンティア

3. の研究経過で報告したことが、成果であり、フロンティアも含まれている。

5. 今後の課題

2年間の研究活動はまずまずの成果があったが、次のような課題が残っている。

- (1) 各々の現在の研究関心の報告が中心であったので、「南方関与の論理」の全体の研究課題の、特に「論理」を浮き彫りにする討議が不十分であること。
- (2) このことは、①「アジア主義」との非連続性、②明治時代の「無告の民」への評価、③大正時代の「南進論」の特質、④大東亜共栄圏構想と南方関与との関連性、⑤戦後の日本人の東南アジア進出につきまとう精神性と戦前と「南進」との連続性、⑥南方関与を行なった個々の日本人や個々の進出企業の個別研究という当初の課題を、改めて意識的に共同して討議する研究会をもつ必要があること。

- (3) ①日本国内の政治・経済・軍事・教育・文化などと「南方関与」の制度化との連関性、
 ②本土の日本人、沖縄県人、日本統治時代の台湾・朝鮮人、日本人との婚姻関係をもつ者
 およびその子弟などの多重性をもつ「日本」の南方関与の分析、③大陸部と島嶼部、植民
 地宗主国別などの「南方」の中での地域差にもとづく「論理」の比較対照、④日本人の職
 種別・社会階層別の「論理」の比較対照も改めて議論し直さなければならない。
- (4) また、共同研究者各自の研究を進捗させるための史料蒐集・聴き取り調査・文献研究等
 の研究活動もさらに深化させる必要がある。

6. 研究業績（平成6年度発表分）

小島 勝

「地域連関の論理—『在外子弟教育論』より見た南方関与の論理」重点領域研究「総合的地域研究」
 総括班編『「総合的地域研究」成果報告書シリーズ』3：33-39, 1994.

"Gedanken zur 'Großasiatischen Wohlstandszone' —Der japanische Geist und das Asiatische."

In Geschichte und Identität III —Geistige und ideologische Voraussetzungen des Totalitaris-
 mus in Deutschland und Japan, Dietmar Petzina, Ronald Ruprecht[Hrsg], Universitätsverlag Dr.
 N. Brockmeyer, pp.41-52, 1994.

清水 元

「西海の海人と南進論」重点領域研究「総合的地域研究」編『総合的地域研究』5：18-20, 1994.

「シンガポール—日本との交流」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいシンガポール 第2版』
 弘文堂, pp.255-278, 1994.

波多野澄雄

「戦時日本の "Wilsonianism" とその遺産」重点領域研究「総合的地域研究」編『総合的地域研究』
 5：9-11, 1994.

「『東南アジア開発』をめぐる日・米・英関係」近代日本研究会編『戦後外交の形成』山川出版社,
 pp.215-242, 1994.

早瀬晋三

「フィリピンに夢を求めた日本人『移民』」宮本勝・寺田勇文編『アジア読本 フィリピン』河出書房
 新社, pp.286-292, 1994.

『インタビュー記録日本のフィリピン占領』池端雪浦・早瀬晋三他編, 龍溪書房, 1994.

「フィリピン行き渡航者調査V（昭和期）—外務省外交史料館文書『本邦移民取扱人関係雑件海外興
 業株式会社 海外渡航者名簿 比島行』より」『大阪市立大学文学部紀要 人文研究 史学』46-11:
 83-108, 1994.

「日本との交流」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいフィリピン 第2版』弘文堂, pp.247-270,
 1995.